

Newsletter

2010 September No. 13



Centre for Advanced Research on Logic and Sensibility

Contents

慶應大学が、そうありうること On Culture and Keio	1
第9回プラトン・シンポジウム 市民公開講座 プラトン哲学の現代的意義 ～『ポリテイア』(国家篇)を中心に～ The 9th Symposium Platonium of the International Plato Society The Significance of Plato's Philosophy in the Contemporary World: Reconsidering the Politeia	2
慶應義塾大学言語教育シンポジウム 英文解釈法再考 ～日本人にふさわしい英語学習法を考える～ Keio University Symposium on Language Teaching: Reevaluating How to Interpret English Constructions, Phrases, and Passages	3
英文論文執筆のための講習会 2010 The Workshop of Writing Research Papers in English for Young Researchers 脳の講習会～基礎知識～ Seminar Series on Brain Science	4
シンポジウム Contingency as a Fundamental Determinant for Human Behavior: Quantitative and Developmental Views from Young Behavior Analysts Dr. Warren H. Meck 講演会 Functional and Neural Mechanisms of Interval Timing	5
GCOE ワークショップ 真理の度合理論は適切か? ～ファジィ論理と真理理論～ Lecture by Dr. Shunsuke Yatabe: Relationship between Fuzzy Logic and Truth Theory Akihiro Kanamori 教授・ Juliet Floyd 教授講演会 Lectures by Professor Akihiro Kanamori and Professor Juliet Floyd 研究セミナー トランスナショナルな移民の生活感情: 文化人類学的アプローチ Emotional Terrain of Transnational Immigrants: a Cultural Anthropological Approach	6
活動報告	7
研究員紹介・事務局だより	8

慶應大学が、そうありうること On Culture and Keio

船曳建夫

東京大学大学院総合文化研究科・文化人類学教授

Takeo Funabiki

Professor, Department of Cultural Anthropology, University of Tokyo



狭い意味での人間の文化、芸術や学問は、時として、数百年のスパ
ンで、衰退することがある。

『源氏物語』を生んだ後、日本の物語文学はどうなったか。鎌倉、
室町の物語群を見ると、質、量、共に劣化したことが分かる。その回
復は、滝沢馬琴や明治の小説まで待つしかなかった。ギリシャの哲学
は、そこを頂点として、あとは下るだけであった。中国の諸子百家も、
その議論の高みは、次の時代に続くことはなかった。人間の文化は、
その水準が下がることがあるのだ。

ただ、さらに見てみると別の事態が起きているのも分かる。数百年
かせいぜい数千人の読者しか持たなかったであろう平安文学は、室町
になると、万を優に超える読者を獲得することとなった。ギリシャの

哲学も諸子百家の議論も、その後の祖述者や注釈者によって、広い地域の多くの人々によって引用
され、生活の中にも活用されることとなった。言い換えれば、「普及」したのである。

私は、現在の日本を含めた経済的先進国において、芸術や学問は活発に普及しつつあるが、その
水準は、多くのジャンルにおいて、今後、低下するのではないかと予測している。その予測は、芸
術と学問の精華というものは、大き過ぎず小さ過ぎない、限られた競争者たちの、競争に集中する
ことの出来る安定した環境から生み出されるとの考えから来ている。過去において文化の競争者た
ちは、平安の貴族、アテナイの「市民」、中国古代の政治顧問団であり、彼らは、身分制の上に立ち、
競い合い、切磋琢磨するエリートとして、芸術や学問を生み出したのである。近代では、前時代の
貴族の特権の継承者、富裕層、大学の教育・研究者がそれである。彼らが、文章や議論の水準を高
く保つことが出来たのは、限られた数のサークル内の競争であるため批判の基準を共有しやすく、
互いの評価が強く働くからだ。

現在、近代がもたらした恩恵は、そうした文化生産により多くの者を参入させることが出来るよ
うになった。ここでも、参入者を、批判と評価によって適切に制限すれば、理論的には、より多くの優れた参
加者によって文化の水準は保たれ、または上昇する。しかし、そうした制限は適切には機能しない。多
くの者による参加の要請を、少数の者が抑えることは出来ないからだ。限られた競争者たちの方が自分
で水準を下げることはない。彼らの活動と、社会制度の変化、伝達技術の進歩が「普及」をもたら
し、それが結果的に、水準の低下をもたらす。つまり、文化は洗練と普及の波動を繰り返すのだ。

さて、こうしたことは学問においても然りであろう。社会が、学問の応用と普及を強く要請する傾向は、
強まっている。自然科学はさておき、私は、人文・社会科学では、哲学から歴史学、経済学に至るまで、
近代の興隆は、もはやある頂点を過ぎた、と考えている。ノーベル文学賞も経済学賞も、年々受賞者
は小粒になっている。時代は、いま多くの解釈者や祖述者によって、複製技術と伝達技術を力とし、
学問がその頂点を低めながらも「普及」を拡大している過程に入ったと考えられる。

こうした中、私は、大学は、「普及」の仕事をするべきではない、またはすべての大学がその仕事
にかかわらずってはいけない、と考える。もちろん、大学がある時点での政治・社会体制の要請を
拒否することは難しい。とりわけ、日本の国立大学のように、国民エリートの養成機関として始ま
ったところの、青い痣を尻に隠し持つところは。

そのとき、慶應義塾大学が、現在の国家体制が始まる以前に開学(安政5〔1858〕年)された唯
一の大学であることは、大いなる意味を持つであろう。現国家体制から距離を取る理念を持ちうる
大学だけが、今後の学問の頂点の低まりと裾野の拡大の潮流の中で、現在の学問の水準を、たとえ
ば数百年後、潮目の変わるときまで、どのような社会体制であろうと、生き延びて、持ち堪える可
能性がある。それは、アリストテレスの哲学が中世神学とその後のルネッサンスまで、地域を変え、
担い手を換え伝えられように、人類的立場からの知の企図となる。慶應義塾大学は、そのような任
に当たるにふさわしい大学だし、そうありうる、と考えるのである。

(see page 5 for English summary)

第9回 プラトン・シンポジウム 市民公開講座 プラトン哲学の現代的意義～『ポリテイア』（国家篇）を中心に～

The 9th Symposium Platonium of the International Plato Society The Significance of Plato's Philosophy in the Contemporary World: Reconsidering the Politeia

(8月7日 三田キャンパス西校舎ホール)

2010年8月7日、プラトンの『ポリテイア』を主題とする市民公開講座が開催された。日本西洋古典学会と日本学術会議が主催し、当拠点が共催したものである。この公開講座は、慶應義塾大学で開催されていたIPS (International Plato Society) による学会最終日の行事でもあり、学者・研究者に加え、市民も多く聴講する盛況を見せた。

第一部は加藤信朗首都大学東京名誉教授による基調報告から始まり、そこでは『ポリテイア』という題がどのように訳されてきたかが概観され、現代におけるその問題が提起された。続いて、当拠点論理・情報班の納富信留教授による講演「『ポリテイア』の現代的意義」においては、『ポリテイア』研究が21世紀において、これまでとは一線を画す段階に入ったことが強調された。S. R. Slingsによるギリシア語テキストの新校訂版、Mario Vegettiによる注釈、G. R. F. Ferrari 編集による研究書、Melissa Lane や佐々木毅氏による受容史研究など、世界の様々な国において重要な成果が生み出されていることが述べられた。

第一部最後の報告は、国際プラトン学会元会長 Livio Rosetti 教授による「プラトンの『国家』は論文ではない」という講演であった。氏によれば、プラトンの『国家』は、既にアリストテレスの読解がそうであったように、多くの時代においてあたかもそれが「論文」であるかのように扱われてきた。しかし『国家』という複雑な構造をもつ対話篇を、1つの主張を持った「論文」のように扱うことは、多くの重要な点を取り逃がすことになる。ファースト・フードの流儀のように『国家』を扱うのではなく、スロー・フードの流儀に従うかのように、じっくりと『国家』という「対話篇」が持つ含蓄を味わうべきであることが強調された。

第二部は岩田靖夫東北大学名誉教授による「アリストテレス政治思想の現代的意義——プラトン『国家』の思想との対比において」と題された講演から始まった。氏はプラトンの政治思想とアリストテレスのそれを対比し、いくつかの問題提起を行った。たとえばプラトンの言う「哲人王」による政治は、王以外の全ての人間（労働者等）から自律性を剥奪していることが指摘された。プラトンによる政治体制と比較されたうえで、アリストテレスの政治論において重要視されるべきは「多くの人々の合意 (endoxa)」であり、この点こそ現代において受け継ぐべき「遺産」であることが示された。

続いて国際プラトン学会副会長の Luc Brisson 教授による講演「プラトン『ポリテイア』における女性」が行われた。氏によれば、国を守る「戦士」のグループに女性を割り当てることは、当時のアテナイ市民たちにとっては馬鹿げたことであったが、プラトンにとって、男女の違いは仕事の割り当てには影響しないものであった。さらにプラトンは、国家を導く役割としての哲学者のグループにも女性の存在を

認めていたと思われ、「魂」を重要視するがゆえに女性と男性を同じ水準に置く点において、現代的とも言える議論を提起していたのである。アリストテレスやフェミニストたちによる痛烈な批判も考慮の必要があるが、プラトンによる先鋭的な水準の議論を忘れるべきでないことが示された。

第二部最後の報告は、佐々木毅学習院大学教授による講演「20世紀政治の中のプラトンと『ポリテイア』」であった。氏は20世紀において、プラトンがどのように政治の文脈で利用されてきたかを示した。19世紀以前、『ポリテイア』は現実の政治にかんする含意を持つとは思われなかったが、ニーチェやヴィラモウヴィッツの解釈を経て、そして第一次世界大戦を契機として、プラトンによる共同体論が注目を集めることとなった。やがてゲオルゲ派の解釈を経て、プラトンはナチスの人種論の根拠としても読まれることになったのである。こうした読解は、後のポパーによるプラトン批判へと繋がってゆくように思われるが、ファイトやクロスマンによる複雑なプラトン評価も見逃されるべきではない。自由な金融市場の崩壊が、政府による積極的な介入への道を準備しているように思われる現在、われわれの世界もなお「プラトンの呪縛」の圏内から逃れていないのではないか、という点が指摘された。

第三部は、出席した研究者・一般参加者による質問に対して講演者が答えるというかたちで全体討論が行われた。「『ポリテイア』をどこから読み始めるべきか」、「哲学者や大学教授は良い政治家になれる可能性はあるか」等々の質問があり、研究者・一般参加者と講演者との間で活発なやり取りがなされた。第一部から第三部まで、三嶋輝夫青山学院大学教授による司会のもとでシンポジウムは円滑に行われ、市民と研究者達による興味深い討論を多くの人が共有できたと思われる。

(鈴木康則)

The 9th Symposium Platonium of the International Plato Society, "The Significance of Plato's Philosophy in the Contemporary World: Reconsidering the Politeia" was held on 7th August, 2010, at Keio University. Six lectures were delivered by Shinro Kato, Noburu Notomi, Livio Rosetti, Yasuo Iwata, Luc Brisson, and Takeshi Sasaki. They discussed the importance of the book *Politeia*, and presented stimulating and enlightening interpretations, for both experts and the public. At the end of the symposium, a general discussion was held between the speakers and the audience. Thanks to the lectures and an excellent chairmanship of Teruo Mishima, we had a great opportunity to further explore the world of Plato.



慶應義塾大学言語教育シンポジウム 英文解釈法再考～日本人にふさわしい英語学習法を考える～

Keio University Symposium on Language Teaching: Reevaluating How to Interpret English Constructions, Phrases, and Passages

(7月11日 三田キャンパス北館ホール)

2010年7月11日に慶應義塾大学言語教育シンポジウム「英文解釈法再考～日本人にふさわしい英語学習法を考える～」が開催された。英語／言語教育シンポジウムは今回で8回目を迎えるが、今回のシンポジウムでは、各登壇者独自の視点で英文解釈法を再評価し、今日の日本の英語教育の状況下で、それを積極的に利用することの意義について議論がなされた。

第一部では江利川春雄教授（和歌山大学）、斎藤兆史教授（東京大学）、大津由紀雄教授（言語と認知班）による講演があり、その後安井稔教授（東北大学名誉教授）より各講演へのコメントをもらった。そして第二部では、鼎談および全体討論が行われた。

江利川教授の講演（演題：英文解釈法の歴史的意義と現代的課題）では、まず日本の英語教育における英語力の低下や英語嫌いの増加などの悲惨な現状が実証的に示された。江利川氏によれば、それらを生む原因はオーラル・コミュニケーション重視の教育であり、さらにそのオーラル重視を生む原因は、ESLとEFLの混同、そしてBICSとCALPの混同にある、とする。そして、日本のEFL環境にふさわしい学習法として、明治期に体系化された英文解釈法があることが提案された。ただ、英文解釈法と一口にいても、その側面は英文和訳から直読直解まで多岐に渡っている。そしてその裏には、いくつか危険性が潜む場合がある。例えば、英文和訳は英語力の鍛錬のみならず、日本語力や思考力の鍛錬にとっても有意義である一方、教師にとって比較的楽な英文和訳中心の一斉授業を行ってばかりでは英語力に偏りが生じる、という危険性がある。学習者の熟達度に応じて教授項目や教授方法を選定し、授業自体に工夫を凝らすことを疎かにしてはいけないということも、重要な点として指摘された。

斎藤教授の講演（演題：外国語学習法としての英文解釈法のすばらしさ）では、実際の授業で英文解釈法のどの側面をどのように生かすのかが、教材を用いながら解説された。講演の中で繰り返し述べられたことの一つに、“英語教師はgeneralistであるべき”という言葉があった。その意図するところは、英文解釈法を利用すると言っても、単なる解読主義にはならず、音声記号を含む発音や会話を盛り込んだバランスのとれた教授項目を設定し、学習者のレベルに応じた授業をする必要がある、ということである。

大津教授の講演（演題：認知科学からみた英文解釈法）では、まず英語教育の現状について、オーラル・コミュニケーション重視の教育が生み出す諸問題、そして英文解釈法に対する誤った評価が指摘された。また英文を解釈するには、文構造、文章構造、情報構造、発話状況、さらには聞き手の人生に対する考えを複合的に分析する、という抽象的で複雑な認知的営みが必要であることが、演歌の歌詞等を用いながら説明された。そしてこのことから、英文解釈法を利用することは人間教育の実践そのものであることを主張した。英文解釈法を利用することのもう一つの利点として、母語を利用した“ことばへの気づき”の育成が実現され、さらには“ことばへの気づき”を介した母語、そして外国語の効果的運用が循環的に実現することが挙げられた。

以上の講演を受け、安井教授は“英語を英語で教える”ことこの限界を具体例を用いながら指摘した。また、母語である日本語を“踏み台”として利用することで、英語学習において日本語と英語を対等に扱うことが可能である、とのコメントもあった。

第二部の鼎談は、事前にフロアから集めた質問に登壇者が答える形で進められ、幅広い議論が行われた。その後の全体討論では多くの質問やコメントが寄せられ、大盛況のうちにシンポジウムは終了した。

言うまでもなく、単に英文解釈法を採用していれば英語教育における諸問題が直ちに解決する、ということを講演者が主張しているのではない。大切なことは、英語教育に関わる全ての者が英語教育の目的を見直し、その目的に合った学習法を、学習指導要領に踊らされることなく検討することである。あくまでそこから生じる行動の一つとして「英文解釈法の再考」がある、と私は考える。

今回のシンポジウムには定員を大幅に超える申し込みがあり、数多くの方々の参加をお断りせざるを得ない状況であった。当日配布したハンドブックおよび資料は、大津研究室ウェブサイト (<http://www.otsuicl.keio.ac.jp/>)、またはブログ (<http://oyukio.blogspot.com/>) に掲載されているので、是非参照されたい。

(桃生朋子)

The Keio University Symposium on Language Teaching was held on July 11, 2010. It mainly focused on reevaluating how to interpret English constructions, phrases, and passages as a means for improving techniques for English instruction in a Japanese EFL environment. First, Haruo Erikawa (Wakayama University), Yoshifumi Saito (The University of Tokyo), and Yukio Otsu (Keio University) evaluated how to interpret English from a different perspective. Then, Minoru Yasui (Tohoku University) provided comments on these lectures. These speakers shared the idea that English learning methods which put weight on the ability of oral communication have harmful effects and we should adopt other ways which are suitable for an EFL environment.



英文論文執筆のための講習会 2010

The Workshop of Writing Research Papers in English for Young Researchers

(5月22日 三田キャンパス北館大会議室)

2010年5月22日に、「英文論文執筆のための講習会 2010」が三田キャンパス北館大会議室において開催された。当日は慶應義塾のみならず他大学の大学院生や若手研究者を中心に多数の参加者があり、まさに、英文論文執筆に対する意識の高さを反映したものであった。まずはじめに、講師を担当された小嶋祥三先生から英文論文の重要性について解説があった。その主旨は、まず英文論文を執筆することによって世界中の多くの研究者に成果を公表できること、さらに同じ研究分野の学究達と知識の交換や共有をすることによって、その研究領域の発展に多少でも貢献できるということであった。

英文論文の重要性を踏まえたうえで、引き続き論文執筆から投稿、アクセプトまでの流れについて具体例を用いて解説があった。さらに、文献の検索、執筆、英文校閲といった投稿前の流れから、投稿後の reviewer とのやり取りに至るまで大変親切な説明が添えられていた。特に、論文執筆準備における関連文献の検索方法や、雑誌の Impact Factor (IF)、各論文の引用度数の検索方法については、会場で直接 PubMed や Web of Science にアクセスするなど実践的な内容であった。また、投稿後の流れについては一事例として、先生が実際に提出された Response Paper を配布し、一流ジャーナルにおける reviewer とのやり取りからアクセプトに至る流れを詳細に述べられた。

小嶋先生は、とりわけ研究を行う上での英文論文を持つことの重要性、被引用数の高い、良い論文を執筆することの重要性を強

調された。また日常の研究生活の中で英語で論文を書くことを習慣づけていく意識が大切であること、それを研究をする上での基本的姿勢として維持し続けることが肝要であると話された。

講習終了後、多数の参加者から英文投稿に関する種々の質問が出され、終了時間を過ぎても活発な質疑応答が行われた。経験の乏しいことから、ことさら英文論文執筆をハードルの高いものと捉えがちな大学院生や若手研究者の背中を後押ししてくれるような内容であった。
(柴田みどり)

The Workshop of Writing Research Papers in English for Young Researchers was held on May 22nd 2010. Professor Shozo Kojima specifically explained how to write effective papers in English.



脳の講習会～基礎知識～

Seminar Series on Brain Science

(7月20日—8月6日 三田キャンパス各会議室)

今年度も脳の講習会を7月20日から8月6日まで計8回実施し、特に今回はこれまで脳について学ぶことがなかった者を対象とした。認知神経科学の立場から、脳についての基本的な事実、視覚・聴覚神経系、運動・行為、視覚・聴覚認知、記憶、情動・動機づけ、言語、前頭葉・統合機能について紹介した。前前年度は外部の研究者に話題を提供してもらい、そのビデオ記録も参考にしつつ、前年度はGCOE内部の研究者が分担して脳についての知識を紹介した。それぞれ素晴らしい講習会であったが、話題提供者が多かったこともあり、レベルの均一性や統一という点で問題があったかもしれない。今回は担当の小嶋一人で行った。

基礎知識と銘打ったこともあり、中高生からご年配まで幅広い年齢の方々の参加があった。夏休みに入っていたので、参加者は50名を超えることが多かった。会では多くの質問があり、午後3時から2時間の予定が30分ほど延長されることがしばしばあった。無論詳しく話すことができなかった領域もあるが、8回の日程で一通りの知識は紹介したつもりである。教科書的なことだけで終わるのではなく、新しい研究の動向なども紹介した。それゆえ、内容が部分的

に初心者向きではなくなったところがあったかもしれない。また、自分が現在考えていることも話したので、その点も問題なしとしない。しかし、終了後に「面白かった」、「また、やってほしい」という声をいただき、満足感をもって終えることができた。秋学期での開催希望もあり、可能なら実施することを考慮したい。GCOEも来年で終了する。「まとめ」的な講習会を開ければと思っている。

最後になりましたが、事務局はじめ皆さんに会場や資料の準備にご努力いただいた。この場を借りて、お礼申し上げます。

(小嶋祥三)

This year's Seminar Series on Brain Science was organized with a specific intent to provide an introduction to the basic concepts of neuroscience. In the eight classes between 20th July and 6th August a wide range of topics from the visual and auditory nervous systems to complex mechanisms such as language and motivation was covered.

シンポジウム

行動の基礎過程としての随伴性：若手研究者からの数量的・発達的見解

Contingency as a Fundamental Determinant for Human Behavior: Quantitative and Developmental Views from Young Behavior Analysts

(6月5日 三田キャンパス東館4階セミナー室)

2010年6月5日の午後から、遺伝と発達班の主催で、California State UniversityのPaul Romanowich博士をお迎えしてのシンポジウムが開かれました。Romanowich博士は行動分析学の観点から、ハトを対象としたマッチング法則や条件性強化の定量分析を進められてきました。同時に、NBAにおけるシュート傾向のマッチング法則を用いての分析、喫煙と禁煙行動の行動分析といった日常社会での行動の数量的研究などの、基礎と応用の双方にわたる多彩な研究を推進されています。今回の来日にあわせ、日本における若手研究者との間での、行動随伴性めぐる共同シンポジウムという形式で行われました。外部の方々の多数のご参加を得られ、約50人収容の会場がいっぱいになるほどの盛況となりました。

シンポジウムの中心はRomanowich博士の発表であり、彼が近年取り組んでいる喫煙行動の改善プログラムが紹介されました。行動分析学の基礎的な知見を活かし、適切な行動随伴性を設定することで禁煙を促すことができることが示されました。その後日本の若手研究者3名からの発表が続きました。慶應義塾大学社会学研究科の熊仁美研究員からは、自閉症児を対象とした、共同注視を利用した介入プログラムが紹介されました。本グローバ

ルCOEの丹野貴行研究員からは、行動随伴性の概念の重要さと、それを数理モデルの域にまで精緻化することを目指した研究が紹介されました。最後に東京女学館大学准教授の井垣竹晴博士から、随伴性が変化した際にいったい何が起きているのかを調べる変化抵抗研究が紹介され、その制御変数は何なのか、また動物で得られた基礎的な知見がどのような応用研究へとつながるのかが論じられました。いずれの発表も、国際誌や国際学会で発表されてきた内容を含むレベルの高いものであり、若手研究者がお互いの知識を交換する有意義なシンポジウムとなりました。またシンポジウムの進行が英語で行われ、参加した大学院生にとっては英語でのコミュニケーションを取る絶好の機会ともなりました。

(丹野貴行)

Symposium entitled “Contingency as a Fundamental Determinant for Human Behavior: Quantitative and Developmental Views from Young Behavior Analysts” was held on June 5th at Keio University. Each speaker introduced their studies concerning contingency in experimental and applied settings.

講演会 Dr. Warren H. Meck 講演会

Lecture by Dr. Warren H. Meck: Functional and Neural Mechanisms of Interval Timing

(5月26日 三田キャンパス東館4階セミナー室)

2010年5月26日、Duke大学教授のWarren H. Meck博士をお迎えし、“Functional and Neural Mechanisms of Interval Timing”のタイトルで、講演が行われた。講演では、Meck博士の長年の研究テーマである、「時間知覚のメカニズム」について、電気生理学、臨床研究、行動実験、脳機能イメージングなど、多岐にわたるアプローチと、そこから得られた知見が発表された。さらに、それらの知見に基づいて構築された、時間知覚の神経機構のモデルや、そのモデルで重要な役割を果たすと示唆される大脳基底核の有棘ニューロンの働きが紹介された。講演の後半には、有棘ニューロンの解剖的特性と機能的特性の関係や、関係する神経

伝達物質の働きなど、参加者を交えて、活発なディスカッションが行われた。

(四本裕子)

A special lecture was delivered by Dr. Warren H. Meck, Professor of Duke University. Dr. Meck presented electrophysiological, clinical, behavioral, and imaging studies, and introduced a model for the interval timing.



1 ページ目の英訳 On Culture and Keio

If we suppose that cultures evolve in time, it comes at no surprise that there are declining as well as rising phases in their histories. As the Muromachi culture and Hellenism clearly illustrate, declining periods are also times of mass culture. We can say that contemporary Japan is in such a

state of cultural diffusion. If so, it is all the more important for the University to well protect the core elements and values of our society – academic and other. I believe that Keio University has a unique role in this regard as an institution with a history independent from and longer than the modern state in Japan. I profoundly hope that it can live up to such a great responsibility!

GCOE ワークショップ 真理の度合理論は適切か? ~ファジイ論理と真理理論~

Lecture by Dr. Shunsuke Yatabe: Relationship between Fuzzy Logic and Truth Theory

(5月14日 三田キャンパス東館4階セミナー室)

2010年5月14日に矢田部俊介(産業総合研究所)博士を招き、「真理の度合理論は適切か? ~ファジイ論理と真理理論~」というタイトルで講演をしていただいた。当日は、哲学、論理学、情報科学、数学といった広い分野から予想を上回る数の方々にお越しいただいた。

ファジイ論理とは、真理値として通常の1.0(真・偽)を含む閉区間[0,1]の任意の実数値をとり、伝統的には「真理の度合い」を表現するとされてきた。しかしながらこの真理の度合い理論を公理的真理理論の中で形式化すると ω -矛盾する。従って公理的真理理論における真理概念と真理の度合い説は整合的ではない、という結論を導くのが矢田部氏の議論である。

以上のように、矢田部博士の講演は哲学的主張(真理の度合い説)を(ω -無矛盾性などの)数学的結果から導くという学際的アプローチをとっており、本研究センターの趣旨に沿ったものである。最後に、当日は非常に活発な議論が行われたことを記しておく。(秋吉亮太)

Dr. Shunsuke Yatabe gave a lecture on the relationship between fuzzy logic and truth theory on 14th May, 2010. We had fruitful discussions from philosophical and mathematical viewpoints.

講演会 Akihiro Kanamori 教授・Juliet Floyd 教授講演会

Lectures by Professor Akihiro Kanamori and Professor Juliet Floyd

(6月11日 三田キャンパス研究室棟会議室A・B)

2010年6月11日に、ボストン大学で数学教授を務める Akihiro Kanamori 教授と、同じくボストン大学で哲学教授を務める Juliet Floyd 教授をお招きし、共に講演をしていただいた。Kanamori 教授は、集合論及び数学史に関する研究を精力的に行っており、特に巨大基数に関する著作 The Higher Infinite (Springer) は広く知られている。今回の講演において Kanamori 教授は、証明概念が数学の実践において果たす本質的かつ多様な役割を、様々な現代の数学的定理の証明を挙げつつ示した。また、数学・論理学の哲学やウィットゲンシュタイン研究を含む広範な分野で活躍する Floyd 教授は、ウィットゲンシュタインと数学者アラン・チューリングとの関係に光を当てることを通じて、ウィットゲンシュタインの数学の哲学に新たな理解をもたらしうることを論じた。

両講演には数学及び哲学の研究者が多数参加し、講演後には発

表者とフロアとの間で活発な議論が交わされた。こうした形で哲学と数学の垣根を超えた分野横断的な交流の場が設けられたことは、数学と哲学双方の分野の研究者にとって大変貴重な機会であったと思われる。(鈴木生郎)

On June 11th, 2010, Professor Akihiro Kanamori and Professor Juliet Floyd gave lectures on the themes related to mathematics and philosophy. Their lectures shed new light on the important and complex role of proof in modern mathematical practice and Wittgenstein's philosophy of mathematics.

研究セミナー トランスナショナルな移民の生活感情：文化人類学的アプローチ

Emotional Terrain of Transnational Immigrants: a Cultural Anthropological Approach

(7月20日 三田キャンパス東館4階セミナー室)

2010年7月20日に、文化人類学グループでは、「トランスナショナルな移民の生活感情：文化人類学的アプローチ」と題して研究セミナーが開催された。世界的に有名な Jean Rouch の民族誌映画『Jaguar』が上映された後、South Carolina 大学名誉教授の Karl G. Heider 先生が人間の移動における感情に関する映像人類学的解釈を行った。また、慶應義塾大学の宮坂敬造先生には文化人類学の立場からディアスポラと生活感情について、シンガポールの Nanjyan Technological University の Kang Yoonhee 先生には韓国の「教育移民」の調査についてご発表いただいた。移民研究の立場から淑徳大学の松岡秀明先生、社会学から、大妻女子大

学の鄭暎恵先生による貴重なコメントがあり、予定時間を大幅に超えるまで、活発なディスカッションが続いた。

(モハーチ・ゲルゲイ)

A research seminar titled “Emotional Terrain of Transnational Immigrants: a Cultural Anthropological Approach” was held on July 20, 2010. Speakers discussed the variety of emotional and social difficulties that immigrants and other people in diaspora have to face. Case studies included migrant laborers in Ghana and Indonesia and Korean students in Singapore.

活動報告

タイトル	開催日・会場	主催・共催・企画	企画者	講演者・参加者
Dr. Magda Osman 講演会 Prediction vs Control in Dynamic Complex Environments	5月1日 三田キャンパス研究室棟 会議室A	脳と進化班	田谷文彦	Dr.Magda Osman (University College London)
真理の度合理論は適切か？ ～フジイ論理と真理理論～	5月14日 三田キャンパス東館4階 セミナー室	哲学・ 文化人類学班	飯田隆 秋吉亮太	矢田部俊介(産業総合研究所)
Globalizing Online Games: Understanding the Virtual, Contextual, and Liminal	5月21日 三田キャンパス南館5階 ディッスカッション・ルーム	哲学・ 文化人類学班	宮坂敬造	Florence Chee (Simon Fraser University)
英文論文執筆のための若手講習会 2010	5月22日 三田キャンパス北館大会議室	研究成果発信・ 支援プログラム	小嶋祥三	小嶋祥三(脳と進化班)
Functional and Neural Mechanisms of Interval Timing	5月26日 三田キャンパス東館4階 セミナー室	脳と進化班	渡辺茂	Warren H. Meck (Duke University)
Contingency as a Fundamental Determinant for Human Behavior —Quantitative and Developmental Views from Young Behavior Analysts—	6月5日 三田キャンパス東館4階 セミナー室	遺伝と発達班	山本淳一 丹野貴行	Paul Romanowich (California State University), Takeharu Igaki (Tokyo Jogakkan College), Hitomi Kuma (Keio University), Takayuki Tanno (脳と進化班)
Akihiro Kanamori 教授・ Juliet Floyd 教授講演会	6月11日 三田キャンパス研究室棟 会議室A・B	哲学・ 文化人類学班	飯田隆 秋吉亮太 鈴木生郎	Akihiro Kanamori, Juliet Floyd (ボストン大学)
意味論研究会 A Topological Approach to Space- time Mappings: Being Bad while Looking Good	6月25日 国立情報学研究所 20階講義室1(2005)	言語と認知班	クリスト ファー・ タンクレディ	今仁生美(名古屋学院大学)、Eric McCreedy(青山 学院大学)
バイオサイコシンポジウム 聴覚野の機能～聴覚実験のための工夫・ 知覚・ワーキングメモリー	7月2日 三田キャンパス東館4階 セミナー室	脳と進化班	渡辺茂	米田孝一(財団法人脳神経疾患研究所附属総合南東北 病院)
意味論研究会 Semantic Realization of the Layered TP: Evidence from the Ambiguity of the Sentential <i>Koto</i> -nominal	7月2日 三田キャンパス 南館地下2階 2B23教室	言語と認知班	クリスト ファー・ タンクレディ	原由理枝(City University of Hong Kong)
慶應義塾大学言語教育シンポジウム 英文解釈法再考～日本人にふさわしい 英語学習法を考える～	7月11日 三田キャンパス北館ホール	言語と認知班	大津由紀雄	江利川春雄(和歌山大学)、斎藤兆史(東京大学)、 大津由紀雄(言語と認知班)
意味論研究会 Quality and Quantity	7月16日 東京大学駒場キャンパス 18号館 コラボレーション ルーム2	言語と認知班	クリスト ファー・ タンクレディ	Uli Sauerland (Center for General Linguistics, Berlin)
トランスナショナルな移民の生活感情: 文化人類学的アプローチ	7月20日 三田キャンパス東館6階 G-SECLab	哲学・ 文化人類学班	宮坂敬造	Karl G. Heider (University of South Carolina), Kang Yoonhee (Nanyang Technological University)、松岡秀明(淑徳大学)、鄭暎恵(大妻女 子大学)、宮坂敬造(哲学・文化人類学班)
脳の講習会～基礎知識集中講座～ 認知神経科学について、脳とその研究法 について	7月20日 三田キャンパス研究室棟 会議室A	研究成果発信・ 支援プログラム	小嶋祥三	小嶋祥三(脳と進化班)
脳の講習会～基礎知識集中講座～ 視覚・聴覚神経系について	7月21日 三田キャンパス北館大会議室	研究成果発信・ 支援プログラム	小嶋祥三	小嶋祥三(脳と進化班)
脳の講習会～基礎知識集中講座～ 運動・行為について	7月27日 三田キャンパス東館4階 セミナー室	研究成果発信・ 支援プログラム	小嶋祥三	小嶋祥三(脳と進化班)
脳の講習会～基礎知識集中講座～ 視覚・聴覚認知について	7月29日 三田キャンパス北館大会議室	研究成果発信・ 支援プログラム	小嶋祥三	小嶋祥三(脳と進化班)
脳の講習会～基礎知識集中講座～ 記憶について	7月30日 三田キャンパス北館大会議室	研究成果発信・ 支援プログラム	小嶋祥三	小嶋祥三(脳と進化班)
脳の講習会～基礎知識集中講座～ 情動について	8月2日 三田キャンパス北館大会議室	研究成果発信・ 支援プログラム	小嶋祥三	小嶋祥三(脳と進化班)
脳の講習会～基礎知識集中講座～ 言語について	8月4日 三田キャンパス北館大会議室	研究成果発信・ 支援プログラム	小嶋祥三	小嶋祥三(脳と進化班)
脳の講習会～基礎知識集中講座～ 前頭葉の機能について	8月6日 三田キャンパス北館大会議室	研究成果発信・ 支援プログラム	小嶋祥三	小嶋祥三(脳と進化班)
第9回プラトン・シンポジウム 市民公開講座 プラトン哲学の現代的意義 ～『ポリテイア』(国家篇)を中心に～	8月7日 三田キャンパス西校舎ホール	主催:日本西洋古 典学会、日本学術 会議 共催:当拠点	納富信留	加藤信朗(首都大学東京 名誉教授)、岩田靖夫(東北 大学 名誉教授)、Luc Brisson (CNRS, France)、Livio Rossetti (University of Perugia, Italy)、佐々木毅(学 習院大学)、三嶋輝夫(青山学院大学)、納富信留(慶 應義塾大学、論理情報班)
「負の感情」とはなにか?～「怒り」 「悲哀」「底つき感」の通文化比較と その手法としての映像～	8月15・16日 京都大学稲盛財団記念館 中会議室	哲学・ 文化人類学班	宮坂敬造	Karl G. Heider (University of South Carolina)、 大石高典、鎌田東二(京都大学こころの未来研究セン ター)、石井美保(京都大学人文科学研究所)、葛西賢 太(宗教情報研究センター)、大沼麻実(慶應義塾大学)、 宮坂敬造、Mohacci Gergely (哲学・文化人類学班)

研究員紹介

尾島司郎



4月より特別研究助教としてGCOEにお世話になっている尾島司郎です。専門は、言語の認知神経科学です。オーストラリアやイギリスに留学した後、愛知県の生理学研究所で脳機能計測を修得しました。首都大学東京で5年間、「脳科学と教育」プロジェクトに携わり、脳波と光トポグラフィを用いて300人以上の小学生を3年間追

跡調査しました。野心的なプロジェクトでしたが、基礎研究と社会応用の両立に課題が残りました。慶應ではこの反省を胸に研究を進めていきたいと思っています。現在は、外国語の学習が母語能力に好影響を与える可能性を、認知神経科学的に探っています。この研究を発展させて、外国語と母語の能力を統合的に伸ばしていけるトレーニングを提案したいと思います。

八賀洋介



『行動変動性の強化プロセスの検討』

2010年4月より人文グローバルCOEの非常勤研究員になりました。私は行動変動性に関する実験的基礎研究に従事しています。生物個体の行動は、その結果を経験することで変容し、これは強化による淘汰と呼ばれています。強化による行動淘汰が機能するためには、まず多様な行動が生起すること、行動の変動性が必要です。その検

討のために私が注目してきたのは、いわゆる正反応を強化することの類比で、変動性が増せば強化を与えることで変動性を高めることが可能であるかでした。本来、強化自体は行動の“無駄”をなくし、“精練”する、換言すれば不要で多様な行動の生存を許さない働きと考えられてきたので、これは強化に関する新しい視点でした。変動性を高めることは実際に可能であることを確認しましたが、今後この手続きはどこまで精緻に変動性を制御可能か、限界はどこにあるかを見定めることから、強化と行動変動性、反応形成について検討するつもりです。

山根千明



このたび哲学・文化人類学班の非常勤研究員を務めることになりました山根千明です。専門領域は西洋美術史で、とくに1920年代ドイツの造形芸術学校ヴァイマル・バウハウスにおける動画像メディア作品を研究対象にしています。

当時、芸術制作をめぐる状況は激しい変化を遂げつつありました。近代という新しい時代の幕開け、機械文明による生活形式の急変、第一次世界大戦のもたらした未曾有の体験、美術史が始まって以来芸術作品の拠

り所であり続けた「ものがたり」の放棄と、それに伴って開始された抽象——すなわち、「生」にかかわるあらゆる側面におけるコペルニクス的転回の渦中で、人々は新たな価値体系を築くべく、さまざまな領域横断の実験に挑戦しました。その大きな結節点のひとつがバウハウスであったと言ってもけっして過言ではありません。

メディア革命の今日、いわば慶應におけるバウハウスの存在とも言えるGCOEという恵まれた状況を活かし、新たな知見を得たいと思います。ご助言・ご指導いただけますよう、よろしくお願いいたします。

事務局だより

活動予定

■ プラトン哲学をどう読むか

『How to Read a Platonic Dialogue』

開催日：2010年9月28日(火)

会場：三田キャンパス東館6階G-SEC Lab

講演者：Samuel Scolnicov 教授

(ヘブライ大学/元国際プラトン学会会長)

■ The Structure of Plato's Parmenides

開催日：2010年10月1日(金)

会場：三田キャンパス東館4階セミナー室

講演者：Samuel Scolnicov 教授

(ヘブライ大学/元国際プラトン学会会長)

■ 脳科学若手談話会(仮題)

開催日：2010年10月9日(土)

会場：東京大学駒場キャンパス(詳細未定)

講演者：四本裕子(脳と進化班) 他

■ 日本パーソナリティ心理学会 第19回大会

開催日：2010年10月10日(日)、11日(月・祝)

会場：慶應義塾大学 三田キャンパス

招待講演(一般公開)：

プレント W. ロバーツ(イリノイ大学アーバナ・シャンペーン校)

渡辺茂(慶應義塾大学・脳と進化班)

対象：大学院生・研究者

※ 会場・時間等の詳細は大会 HP よりご確認ください。

<http://kotrec.keio.ac.jp/jssp19/index.html>

編集後記 Newsletter 13号では、5月から夏休みにかけての各班の活動報告を中心にお伝えします。さらに、新年度が始まり、4月から本プログラムに加わった新しいメンバー3人をご紹介します。プラトンから神経伝達物質まで、論理と感性の相互関係から浮かび上がる研究課題の多面性に改めて感動し、そこで暗黙に結びついていく様々な研究活動の拡張を示す、本拠点にふさわしい内容をお届けするように心がけてきました。ぜひ皆様、今後の新しい研究への刺激にしてください! 不慣れな編集でご迷惑をお掛けした点多々あったかと思いますが、新年度のお忙しい中、原稿を執筆頂いた方々には、心から感謝をいたしております。(モハーチ・ゲルゲイ)

慶應義塾大学 論理と感性の先端的教育研究拠点
Centre for Advanced Research on Logic and Sensibility
Newsletter 2010, September, No. 13

発行日 2010年9月30日

代表者 渡辺茂

〒108-0073 東京都港区三田3-1-7 三田東宝ビル7F・8F

TEL : 03-5427-1156

FAX : 03-5427-1209

keiocarls@info.keio.ac.jp

<http://www.carls.keio.ac.jp/>